

血管ハートセンター

■ スタッフ

センター長		土肥 薫
医師	常勤	5名
	併任	1名

■ 特色・診療対象疾患

平成15年5月に「血管内治療センター」として開設した当センターは、平成26年4月より伊藤正明病院長（循環器・腎臓内科学教授）をセンター長（兼任）および阪井田博司（先進的脳血管内治療学教授）を副センター長（兼任）として、新たに「血管ハートセンター Vascular and Heart Center」に改称しました。現在はセンター長1名、脳神経外科・小児科・放射線科・心臓血管外科・循環器内科の5名の専任助教と、精密エコー担当の中央検査部生理検査技師1名の7名体制で、診療科を超えた診療の充実に取り組んでおります。

1. 当科の特色

様々な血管病変に対する血管内治療は、細いカテーテルを用いる「体に負担が少ない」低侵襲治療です。全身病である動脈硬化性疾患の場合、同時に複数の診療科による管理・治療が必要となる病態が多く、関連診療科や部門の円滑な連携が必要です。「血管ハートセンター」は、脳神経外科・循環器内科・臨床麻酔部・心臓血管外科・放射線科・小児科・中央検査部などからスタッフを配属し、他の関連診療科・部門にもカンファレンスに参加していただき、総合的に治療方針を検討する全国的にも特色のある診療体制を構築しています。

2. 主な診療対象疾患

主な診療対象疾患として

- 1) 虚血性脳血管障害（頸動脈狭窄症など）
 - 2) 心臓弁膜症（大動脈弁狭窄症など）
 - 3) 大動脈疾患（大動脈瘤・大動脈解離など）
 - 4) 先天性心疾患（先天性心奇形・中隔欠損症など）
 - 5) 虚血性心疾患（狭心症・心筋梗塞など）
 - 6) 静脈血行障害（門脈狭窄、肝静脈狭窄など）
 - 7) 血管奇形（血管腫、静脈奇形など）
 - 8) 多発外傷（骨盤骨折、肝損傷、腎損傷など）
- が挙げられます。令和5年度からは左心耳閉鎖デバ

イス（WATCHMAN）を用いた経皮的左心耳閉鎖術や経カテーテル肺動脈弁留置術（TPVI）が可能となりました。また、脳動脈瘤に対する5種類の新規コイル、急性期脳梗塞血栓回収における3種類の新規吸引デバイスや新規ガイディングカテーテル、頸動脈ステント留置時の新規プロテクションデバイスを導入し、より安全で確実な治療を行っています。

■ 活動実績

当診療科は、脳神経外科・小児科・放射線診断科・心臓血管外科・循環器内科の各科で連携を図り、血管内手術を中心とした集学的治療を提供しております。また精密エコーを駆使した診断と治療のサポートも行っております。

1. 実績

1) 精密エコー

超音波診断装置（LOGIQ S8・LOGIQ E9）・光干渉断層撮影装置（ILUMIEN OCT イメージングシステム 15575-12）を駆使して、高精度の診断やカテーテル治療のサポート・エコーガイド下の先進治療を行っています。

令和5年度のエコー検査件数は、計842件（外来489件・入院353件）でした。

- ・頸動脈エコー：422件（外来240件・入院182件）
 - ・下肢動脈エコー：287件（外来165件・入院122件）
 - ・腎動脈エコー：102件（外来79件・入院23件）
 - ・シャントエコー：31件（外来5件・入院26件）
- 他に下肢血管内治療に於いてエコーガイド12件を施行。

2) カテーテル治療

動脈硬化性疾患は全身の動脈に及ぶため、各科が合同で検査、治療にあたることもあります。令和5年度の主なカテーテル治療件数を下記に示します。下記以外にも各種治療を行っています。

- ・脳梗塞・急性期血栓回収療法：31件
- ・脳動脈瘤：47件
- ・頸動脈：14件
- ・心房中隔欠損症：6件
- ・卵円孔開存症：12件
- ・動脈管開存症：5件
- ・肺動脈弁疾患：2件
- ・大動脈弁狭窄症（成人）：65件
- ・左心耳閉鎖術：18件
- ・僧帽弁閉鎖不全症：27件
- ・冠動脈：270件


- ・大動脈瘤、大動脈解離：
EVAR 32 件・TEVAR 9 件
- ・下肢動脈：109 件
- ・救急外傷、腫瘍出血等の緊急動脈止血術：38 件
- ・内臓動脈瘤コイリング：14 件（緊急 7 件）
- ・門脈ステント留置術：6 件
- ・腹部静脈サンプリング内分泌検査：13 件
- ・静脈奇形硬化療法：4 件
- ・リンパ管造影、塞栓術：6 件
- ・血管内異物除去：準緊急 2 件
- ・その他、血管造影：30 件（緊急 3 件）

3) 血管ハートセンター症例カンファレンス

平成 26 年 5 月に開始した隔週開催の「心臓血管カンファレンス」では、心疾患を中心に毎回 2～3 例の検討を行い、治療適応や方針について議論を重ねました。各分野の専門スタッフから意見を募ることで、様々な条件の患者さんに、より適切で有効な治療方法を検討できる環境が整っております。

■ 今後の展望

関連診療科の垣根を超えて更なる連携を目指しております。動脈瘤新規治療デバイスの Woven Endo Bridge、体重 2kg 未満の低体重児に対する経カテーテル的動脈管開存閉鎖術の導入も視野にいれております。今後も、高度先進医療を円滑に提供できる組織整備を推進するとともに、研究・教育分野の充実も図りたいと考えています。

 https://www.hosp.mie-u.ac.jp/bumon/kekkan_heart/